東京大学「コロナ救済措置」打ち切り　“留年危機”学生相次ぐ…診断書提出も補講なし
2022/8/2 テレ朝ニュース

All Nippon NewsNetwork(ANN)

https://news.yahoo.co.jp/articles/a86e141b996cee6472f4767cb153ddb7e09ac358

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、愛知県や宮城県などが政府が新たに設けた「BA.5対策強化宣言」を、今週中にも出す考えを示しました。また、東京大学では、新型コロナに感染して期末試験を受けられなかった学生の救済措置が打ち切られたために、留年の危機に陥る学生が相次いでいることが分かりました。

■愛知・宮城「BA.5対策強化宣言」発令へ

愛知県・大村秀章知事：「毎日1万人を超える感染者。尋常なことではない」

愛知県は、今週中にも高齢者などに外出自粛を求める「BA.5対策強化宣言」を発令する方針を明らかにしました。

発令を決定した宮城県では、村井嘉浩知事が次のように述べました。

宮城県・村井嘉浩知事：「病床逼迫（ひっぱく）。極めて厳しい状況」

■感染者の追試制限…東大生「留年するしか…」

ホテル療養中の教養学部1年生：「現在、コロナの隔離で大学の試験を受けることができない状況ですね」

新型コロナに感染し、ホテル療養中の男性。東京大学教養学部に通う1年生です。現在、東京大学は春学期の期末試験中ですが、男性のように試験を受けられない学生がいます。

そんな彼らに突き付けられた現実、それは“留年”です。

ホテル療養中の教養学部1年生：「留年して、もう1回やり直す。コロナかかったら、もう無理ですね。もう諦めて下さいって感じです」

これまで東京大学教養学部は、コロナに感染するなどして試験が受けられなかった学生に対し、救済措置として後日、通常の試験と同じ100点満点で評価される追試を実施して

きました。
　しかし、今年の春学期からは満点でも 75 点までしか取れなくなったのです。学生からは困惑の声が上がっています。
　ホテル療養中の教養学部 1 年生：「医学系とか薬学系とか（の学部に進学するには）大体（試験の点数が）平均 90 点ぐらい必要。試験の満点が 75 点になったら、他の学期で挽回（ばんかい）しても無理ですよ」
　東京大学では入学後、全員が 2 年次まで教養学部に所属します。3 年次から希望の学部に進みますが、競争率の高い学部・学科に進めるかどうかは 2 年次の春学期までの成績順で決まります。
　従って、全員が希望通りに進学できるわけではないのです。
　ホテル療養中の教養学部 1 年生：「行きたい学部もちゃんとあるわけで。わざわざ追試受けないで、留年するかですね」
　東京大学が追試の評価方法を変更したのは、今年 6 月。その理由については、次のように説明しています。
　東大教養学部：「コロナ感染等による虚偽申請を防ぎ、公平性を求めるためです。通常試験の受験者より、追試受験者の勉強時間が長くなることで有利になることを防止します」
　当時、東京の一日の感染者は 1500 人ほどの時期。しかし、試験期間中に感染者は 2 万人以上になりました。学生は感染しても救済されることなく、不利な状況に追い込まれています。
■診断書提出も補講なし…学生自治会が“抗議”
　さらに、留年の危機は通常の授業にも…。将来、医師を目指す東京大学教養学部 2 年生の男性は、次のように話します。
　東大教養学部 2 年生：「コロナに感染していたので、補講をお願いしたが、断られ。その結果、単位が不認定となり、留年ということになりました」
　男性は、今年 5 月にコロナに感染。自宅療養を余儀なくされました。その結果…。
　東大教養学部 2 年生：「合計 6 回のリモート授業のうち、2 回の講義を欠席」
　授業の欠席は「当日の 11 時までに報告」という教員が独自に設けたルールがありましたが、男性は 1 週間以上、意識がもうろうとし、食事も取れない状況だったため、報告が遅れてしまいました。
　東大教養学部 2 年生：「重篤な症状で呼吸困難、中等症以上の症状。正直、授業というよりは、自分の命とか健康とかを優先して動いていた」
　男性の症状が和らぎ始めたのは、感染から 8 日後。「コロナに感染し欠席はやむを得なかった」旨を教員に報告。補講措置を申し入れましたが…。
　東大教養学部 2 年生：「日数の経過から補講は認めないという返信が教員からあり。自分が 1 週間以上、苦しんだことを診断書で提出したところ、診断書の受理を拒否。補講もされず、結果、留年となりました」
　東京大学教養学部の学生自治会は、コロナに感染した学生らの措置について大学に抗議しています。
　東大教養学部　学生自治会・長谷川恭平会長：「教養学部も真摯に対応すべき状況にはきている。コロナに感染者に対する配慮。それに伴う社会に及ぼす影響とか、どう思ってい

るのか聞きたい」

1 日、東京大学教養学部に問い合わせたところ、現段階でコロナに感染した学生らの措置について、再検討はしていないと回答がありました。

（「羽鳥慎一 モーニングショー」2022 年 8 月 2 日放送分より）新型コロナウイルスの流行「第 7 波」のスピードは、爆発的と言っていいほど速い。

新規感染が 1 日 10 万人を超えた今冬の「第 6 波」ピーク時と同水準に早くも達し、国内の累計感染者数も 1 千万人を突破した。

政府は新たな感染防止対策を発表したものの、「行動制限は選択肢としない」を基本方針とする。新味に欠けると言わざるを得ない。

急速な感染拡大はオミクロン株の派生型で感染力が強いとされる「BA・5」への置き換わりが進み、ワクチン接種で獲得した免疫も減衰しているためとみられる。まだ重症者、死者数は低い水準だが、感染者急増は各地で続き、病床使用率が急上昇している。

人の移動が活発になる夏休みやお盆の帰省シーズンを控え、警戒を怠ってはならない。とりわけ盛夏を迎えて熱中症のリスクも高まっており、「同時多発」となれば医療逼迫（ひっぱく）を招きかねない。

第 7 波の急拡大を受け、政府はワクチンの 4 回目接種の対象を医療従事者らにも広げる方針を示した。接種対象は約 800 万人増えるが、予防効果は未知数だ。

さらに主要駅や空港で 100 カ所以上の無料検査拠点を整備。観光業界支援の目玉の全国旅行支援は先送りする。若い世代の 3 回目のワクチン接種を促すという。

ただ岸田文雄首相は「今は感染症対策と経済社会活動の両立が大事だ」として、まん延防止等重点措置適用など行動制限は求めない方針に固執する。当然、打つ手は限られ、手詰まり感が強い。

確かに急激な物価高や円安の悪影響が懸念される中、経済社会活動を抑制するのを避けたいのも理解できる。だが、最も重視すべきは国民の命と健康である。

コロナ感染対策は、試行錯誤しながら既に 2 年半に及ぶ。この間の反省に基づき、医療や検査体制などの目詰まりに切り込み、大胆に改善せねばならない。

第 6 波では適切な医療を受けられずに自宅や施設での容体悪化が相次いだ。手をこまねいていれば、再び後手批判を浴びかねない。

経済社会活動と感染予防のバランスをいかに取るか。コロナ対策は一筋縄ではいかない。科学的根拠に基づく方針を明確に示し、国民に丁寧に説明して理解を得てこそ実効性が高まる。

一人一人の心がけも大切だ。必要に応じたマスク着用やワクチン接種など基本対策の徹底が求められる。「コロナ慣れ」「コロナ疲れ」こそが大敵と考えたい。